

Title	希臘の所謂自然哲學者に就て
Sub Title	
Author	青木, 巖(Aoki, Iwao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1935
Jtitle	哲學 No.14 (1935. 8) ,p.103- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000014-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

希臘の所謂自然哲學者に就て

青 木 巖

「ギリシヤ最初の思想家達は、傳統に依り哲學者と看做されてゐる。従つて、彼等の見解は特に哲學者の手に依つて研究され來つたのであつて、個々の科學の歴史家達は、普通、彼等自らが彼等より遙かに優れる權威ありと看做した哲學者——歴史家によつて築かれたる結論を、更に一層充分なる探查を加へずして踏襲し來つた。併し、その搖籃時に於ける科學發展の明晰なる理解にとつて、かの初代の所謂自然哲學者の諸體系を復舊せんが爲に哲學者達が自然的に採用したる方法が如何に重大なる不都合を提示するかは、容易に認め得る所である。古代の著作者達が個々の各自然哲學者に就て提供する散亂せる斷片や部分的なる教示を前にして、哲

學者は事實先づ第一にその最も主要なる形而上學的觀念を抽出せんと試みるであらう。必要に迫らるれば眞實彼の生時に屬する用語を以てなすともさして懸念する所なく斯かる觀念を自ら構成するであらう。次いで彼はその母體觀念の周圍に彼が第二次的と看做す諸見解を集結し而して能ふ限りそれらの論理的脈絡と歴史的由來を確立する事であらう。然も必ずや彼は純粹に科學的なる性質の専門的命題を無視するか若くは單に好奇心の對象として引用するのみであらう。斯く言へばとて私は決して斯かる方式の哲學史理解を反撃せんとする者ではないから其點は充分に誤解のないやうにして貰ひ度い。……又私の主張せんと欲するは此點なのである。斯様にしては全真相を剩す所なく把握しないのみである。斯くしては人は全く特殊な見地より唯々その限られたる一面を觀するのみである。斯かる次第なれば哲學史なるものは科學史に依つて完成さるべく且つ後者は前者に依據するが如き事なく直接に且つ全然反對の方法に依つて確立されねばならない。プラトンに至る迄ギリシヤの思想家は殆んど全て今日の所謂哲學者だつたのではなく曾つて稱ばれたるが如く所謂自然學者若くは *scopists*

であつた。……兎も角、古代自然哲學者の思想體系の核心は決して形而上學的觀念ではなく、彼等の各々がその個々の知識の總體に依つて世界に就て構成したる一般的觀念だつたのである。……斯くて、斯かる核心を再建し、斯かる一般的觀念を復舊せんが爲には、明かに、哲學史に於て寧ろ最後列に置かれて多少とも輕視されてゐる、自然科學の雜多なる問題に就ての専門的見解を、最前列の位置を以て進展せしめねばならない。』

以上は、ギリシヤ思想史研究史上に於て諸種の輝ける足跡を遺したる Paul Tannery が、その代表作「ギリシヤ科學史研究」*Pour l'histoire de la science hellène*, Paris 1930, p. 10-12 の劃期的なる試みとして採用せる方法に就て述べた一節である。この好著のものされた當時(1887)にあつて、斯かる態度を以て在來の哲學史に臨み、斯かる方法を以て新しきギリシヤ思想史の著述を企てたる著者の達識は、今日の吾人をしても唯々尊敬私淑の念を起さしむるのみである。又、斯かる態度は尙ほ今日にあつても傾聽すべき數多くの暗示を含んでゐるであらう。然るに今日では、少くともかの所謂自然哲學者の關する限り、この好ましきフランスの碩學の教示に逆行

して、再び、但し現代に用ひらるる意味に於ける、*Ontologie*の觀點より考察する事が痛切に要求されてゐるのである。寧ろ、古代自然哲學者の思想體系の核心は決して自然科学的一般觀念ではなく、實に形而上學的觀念であり、自然的立場に依つてではなく、形而上學的に理解して始めて彼等の思想體系が闡明される、とさえ云はざるを得ないのである。

ギリシヤ哲學が外界の認識より出發し、全然宇宙論的なりし傾向を以て進み、次いで自然哲學的問題より形而上學的問題へ移行し、自然を思索の對象としたるものが人間の魂をその對象とするに至つて、若くは客觀的世界より主觀的世界へ轉じて、所謂人間論的時代に達した、とは一般に行はるるギリシヤ初期哲學史觀である。筆者は此處で決して斯かる觀方の不妥當なるを指摘せんと欲する者ではなく、寧ろ一面、斯かる史觀の特に教育的に有效にして價值あるは、筆者も確認せざるを得ないのであるが、初期のギリシヤ哲學には斯かる見地に依るのみにては到底理解され得ざる點が多々存するが故に、特にかのマアルブルヒ學派の哲學史に於て其頂點に達したる、謂はばヘゲルの哲學史觀の流を汲める如上の見地に立た

ずして、尙ほ遙かに良くその理解され得る事を示さんと欲するのみである。

初期のギリシヤ哲學を支配したるものは、客觀よりも寧ろ主觀、自然よりも寧ろ魂、物質よりも寧ろ生命、何よりも人間そのものであり、所謂 Anthropomorphismus なる言葉によつても恐らく表現され得べき傾向であつたと云ふも敢て過言ではないであらう。此處では斯かる對立が嚴密に成立すべきや否や問題ではなく、少くとも初期のギリシヤ哲學の關する限り、斯くの如き對立に據つて考察し得るのである。斯かる關聯に於て、神祕精神なるものよりギリシヤ初期の自然哲學を導出せんとするに餘りに急なるその極端に過ぐる態度を除けば、K. Joël の *Der Ursprung der Naturphilosophie aus dem Geiste der Mystik*, Jena 1926 は吾人を啓發する事甚だ大なる興味深き好著である。他面、所謂 Vorsokratiker なるものをプラトン達の *Mischokarakter* に對する *reine Typen* とすかの Nietzsche (*Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen*, Reclams Bibl. S. 11) の如きは例外として、彼等を以て古典哲學即ちプラトン思想の問題史的並に體系的根柢と看做すが從來の哲學史的傳統であるが、近代では、是等の思想家を獨立的哲學者として各々をその *Einzigkeit* に於て理解せ

んとする事が最も要求されてゐるのである。(cf. W. Jaeger, *Paideia*, Berlin 1934 S. 206)

以上の如き主張は一見奇矯に過ぐると想はれるかも知れないが、恐らく從來の觀方が餘りに一面的なりし爲に然るのであらう。初期のギリシヤ哲學を通じて躍動せる中心原理は、誰しもの認むるが如く、一元性、流動性、無限性などに盡きてゐると云へやう。而して、是等の原理は外なる自然界の觀察の結果として把握されたのではなく、實に内なる人間的存在より發露したるものであり、端的に云ふならば、それらは所謂 *existenziell* に把住されたものであるとも云ひ得るであらう。先の對立に於ける前者に屬するものではなく、後者に屬するものよりして始めて理解され得るものなのである。従つて、彼等初代の哲學者達の主張する所を、單に實踐や生活を離れた純粹の理論として、神話を完全に離脱した宗教的要素を驅逐した合理的態度として、理解せんとするは謬つてゐる。ギリシヤ哲學がその長き目覺ましき發展過程に於て徐々にこの前者より後者へ移り往きたるは、自然の道でもあつて認めざるを得ない事實であらうが、その發端時代は、人間的存在や宗教的要素を離れては到底了解出來ないのである。ギリシヤ哲學なるものの誕生は、彼等

初代哲學者達の事物の根原を求めんとする問ひやそれに對する彼等の解答には存せずして、その問ひ往く態度にあつたとはよく言はるる所であるが(①② J. Bennett, Greek philosophy, Part 1, London 1924, p. 21)その態度は唯單に合理的であつたとか、理論的であつたとか、客觀的であつたとか規定さるべきではなく、實に人間的態度がその主要なる契機をなしたる事を忘却看過してはならない。確にギリシヤ哲學は最初より人間論的だつたのである。斯く言へば、哲學の誕生なる言葉そのものが無意味であつて、神話の世界より哲學なるものへの推移は、或はそれらの識別が不可能となりたるを得ないであらうと斷言非難さるるかも知れぬが、吾人はかのアリストテレスに遡る *φύσις λόγος* と *θεολογος* の對照に餘りに捉はれてはならないと考へる。B. Bauchの如きも、彼等初代哲學者達の史的並に體系的意義を單に彼等の *Abwendung vom Mythischen und Hinwendung zum Natürlichen*(Das Substanzproblem in der griechischen Philosophie bis zur Blütezeit, Heidelberg 1910, S. 15)に求めてゐるが、斯かる自然的なるものへの轉向は、アリストテレス(Metaph. 983b30)の證言に依るも明白なるが如く、既に神話そのものの中にも發見され得る思惟形態であるのみならず、斯

かる見解は如上の對照に拘泥せるものと言はざるを得ない。かの敘事詩の分析は如何に理性的思惟がミットスを動かしてゐるかを明示するのであるから、事實神話的思惟と理性的思惟と殆んど遊離する譯にはいかないのである。科學的哲學なるものの發端は、理性的思惟の發端とも神話的思惟の終局とも一致するのでなく W. Jaeger の巧妙なる譬喩的言葉に従つて「ロゴスの形成要素を全く缺ける神話的直觀は尙ほ盲目にして、神話的直觀の生ける核心なき論理的概念構成は空となる」(op. cit., p. 208) と云ふべきである。

アリストテレスは彼の所謂自然哲學者の事を『存在するものの検討 *entelecheia*』(Metaph., 983b1) と稱んで居り、而して、*ontōn* に従事し、且つ眞理に就て哲學した人々』(Metaph., 983b1) と稱んで居り、而して、彼はその『存在するもの』に依つて全く *ontisch* な對象的存在を意味してゐるのであるが、吾人は以上の如き對立に捉はれ過ぎる事なく、彼等初代哲學者の關心したる存在が、單に *Vorhandensein* に終始せずして、*Existenz* を意味したるものと解するが妥當である。J. Stenzel の指摘せるが如く、其處では『存在は常に主觀と客觀の隔離を超越する二重の意義を保有してゐる。それは意識に對立する對象的實在を

意味すると同時に、この意識を自ら形而上學的に支持するもの、人間としての人間の存在を意味してゐる』(Metaphysik des Altertums, Berlin 1931, S. 29)とも云ふべきである。而して、『果して此處では精神的なるものが自然の單なる一部として取扱はれてゐるのか、それとも寧ろ自然そのものが一の精神的なるものとして取扱はれてゐるのか、何れとも云ひ得ない』(M. Wundt, Geschichte der Metaphysik, Berlin 1931, S. 16)ではなく、人間の社會的・政治的現實存在を通じて眞實の Gegenständlichkeit が意識されたのであつて、従つて、人間の具體的存在を通じて自然が把握されたと云はねばならない。

彼等に於て世界が對象的に謂はば etwas fertig Gegebenes (W. Kinkel, Geschichte der Philosophie als Einleitung in das System der Philosophie, Gießen 1906, S. 49)となつてゐて、彼等が自己を忘れて客觀の世界に没頭せる自然探究者であつたとすは正鵠を失した見解である。彼等に於て實在の把握されてゐるのは客觀的自然概念に於てではなく、生の概念に於てであつて、彼等の科學發展の基礎となりたる Urphänomene は生のそれであつた。(cf. J. Stenzel, Platon der Erzieher, Leipzig 1928, S. 29) <ラクトンイ

トスの如きも明かに『吾れは吾れ自らを探求した』ἐπινοήσαντες εἰσευρόν (H. Diels, Fragmt. 101) と述べて居り、これは彼の關心したるものが外界の Vorhandensein に非ずして、寧ろ彼が自己の Dasein に就きて問ひたる事を明確に物語つてゐるのである。大體ギリシヤ語の εἰσέναιなる言葉には、この意義に關しては從來諸家の間に種々劇しき論争が行はれたにせよ、少くとも生の展開する意義も存したるは蔽ふべくもないのであつて、従つて、彼等の思索の出發點が純粹に物的なる客觀的存在にあつたと看做すは不當である。寧ろ、斯かる意味よりすれば、『生よりの發出が自然概念の根源に存し、最初の自然認識は生の認識であつた』(K. Joël, op. cit., S. 58) とも云ひ得るであらう。εἰσέναι より出でたる近代語 Physik の概念を導入するが誤つてゐるのであつて、寧ろ彼等を動かした動機は常に metaphysische Fragestellung だつたのである。

以下初代ギリシヤ哲學者の各個に就て考察し往々に従ひ、以上の諸點は現實に了解され得るのであるが、然し、此小論に於ては、吾人の考察は所謂ミレトス學派に屬するタレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスの三人に留められるであらう。

タレスの哲學思想が始めて語られたのはアリストテレスに依つてであるが、彼の傳ふる所は次の三點に盡きてゐると言へやう。即ち、水が *ἕρως* である (Metaph. 983b20) との主張と、萬有は神々にて充てり (De anima 411a8) との思想である。この二つの主張は一見何の內的關聯もなきものと考へらるるやうであつて、J. Burnet (Early Greek philosophy, London 1920, p. 50) の如きは、その第二の命題を以て、ミレトス學派の創始者としてよりは寧ろかの所謂七賢人の一人としてのタレスに屬するものであり、一の *apophthegm* を論據となすは安全でなく、斯かる命題に重きを置くは誤謬であると論じてゐる。が、惟ふに從來初期のギリシヤ哲學者達の存在論的方面が餘りに等閑に附され來つた原因の一つは、確に此點に存するのである。アリストテレスがタレスを以て水が *ἕρως* なりと主張したと傳ふる時、彼がその *ἕρως* なる言葉を如何に理解したるかと云ふに、彼は之を『全ての存在するものの存在の原素であり、その發生の根源にして且つその死滅の終點たる所のもの、その偶屬性

に於て變化するもその本質は留まる所のもの』(Metaph. 983b8)と規定してゐる。然も彼に依れば、タレスを含めての創始時代の哲學者は『質料の形に於ける原理』(τὸ εἶδος αἰώνιον)が萬有の唯一の原理なりと考へたと云ふのである。斯くて、確に吾人は此處に、縦しそれがC. Baunkerの言ふが如く『一の失敗せる自然科学的假設』(Das Problem der Materie in der griechischen Philosophie, Münster 1890, S. 9)であるにせよ、或意味に於て一の神話的なる世界把握より自然科学的なるそれへの推移を發見し得るであらう。併し、先の第二の命題を顧慮する時、吾人は更に深く存在論的立場に於て理解せざるを得ないのである。タレスが水なる原質の中に對象的存在なる存在の本質を求めんと努力したる事も覆ひ難き事實であらうが、寧ろ其處には『自然的存在と人間的に人格的なる存在との境界を根本的に橋渡しする世界形象』(J. Stenzel, Metaphysik, S. 32)が存し、『その世界形象を規定するものは、何らかの物理的事實に非ずして、生の過程 Lebensvorgängeであつて、後者が前者をではなく、前者が後者を Modellとしてゐる』(Ibid.)のである。K. Joëlの激越なる言葉を以て云へば、Erhebung des Menschen zum Weltssymbol, zum Schlüssel der Welt (Ursprung, S. 53)が行

はれてゐるのである。單に對象的存在としての自然の根源が求められたのではなく、人間的存在を通じ、斯くてかかる規定が把握されたものである。無常にして變轉流動して罷まざる人間的存在過程が、自己のシムボルを水に見出したと云ひ得るであらう。

而して、此處よりタレスの第二の命題へ移るは極めて容易である。萬有が根柢に於て水であるとの世界形象が生過程に依つて規定されたるタレスに於て、萬有には運動の原因なる魂 (*De Anima* 405a19) が滲透してゐる *ψευδὴς* が故に萬有は神々にて満てりとの主張が出で來りたるは、蓋し理の當然であらう。 *Das Lebendige* が凡ゆる存在の根本範疇を爲したのであつて、萬有は神々にて充てる譯である。神々とは、萬有の中に潛んでそれ自體のうちより有り、凡ゆる形象を放出すると共に、再びそれ自體のうちへそれらを迎へ容るる力に外ならない。人間的存在の無常性や時間性が自然に關心せしめたのであつて、それが客觀的に把握されて例の *πύρα πέ* になり、それが主觀的に把握されて萬有魂論とか萬有神論と成るのみなのである。以上の第二の命題はよく所謂 *Hylzoismus* なる名稱の下に指示され

來つたが、斯かる次第なれば、タレスには汎神論的傾向こそ認め得べきも、物活論は其處では意味をなさない。以上の命題を物活論的に理解せんとするは、第一の命題を純粹に自然科学的に理解せんとする態度の結果でもあらうし、且つ、斯くてそれは是等兩命題の思想的脈絡を辿り得ざる結果に導くであらう。

凡て自然科学的考察は決して無限者の形而上學的體驗を導くものではないのであつて、水の變化流轉に於て究極的實在の存在の仕方を認めたるタレスの思想が、その後繼者アナクシマンドロスに於て、その思惟動機が一層鋭く把握されて、無限なるもの、*apeiron* に到達したるは當然であつた。タレスに於て生けるものが凡ゆる存在の根本範疇であつたが、此處に於ても *Grundinteresse* は自然そのものではなく、生の過程であり、斯かる過程に就ての形而上學的意識が斯かる過程に盡きざるものを求め、有限なる形あるものにその規定を與ふる形なき無限なる規定されざるものに向つたまでである。アナクシマンドロスが眞に形而上學的な深みのある世界形象の創始者であつたとは云ひ得やうが、西洋最初の形而上學者なる名稱を彼に歸せんとする人 (e. g. W. Windelband, *Geschichte der abendländischen Philosophie*

im Altertum, München 1923, S. 23 Anm. 1)があるが恐らく形而上學的にのみ彼はタレスの『後繼者』*Eudoxos*と看做され得るのであるから、斯かる主張は不當である。『が存在するものにとつてその發生の根源たるものへ、その死滅も亦必然的に向ふ。蓋し、それらは不正に對して時の判決に従つて相互ひに罰を受け償ひをするからである。』とは、テオプラストス(Physic. opinion. fr. ap. Simplic. Phys. 24, 13)がアナクシマンドロスの、恐らく唯一の彼自身の言葉として傳ふる所である。アリストテレスは、恐らくこの主張の解説として、『例へば空氣は冷く、水は濕潤にして、火は熱しと云ふが如く、斯かるものは相互ひに矛盾性を有し、若しその一が無限ならば他のものは既に滅失したであらうから』(Phys. 204b27)と、自然科學的理由を指摘してゐるが、其處に社會的要素が主要なる役割をなせる事は見逃され得ず、又、看過されてはならない。(cf. Pierre-Maxime Schuhl, Essai sur la formation de la pensée grecque, Paris 1934, p. 192) 世界過程が人間の社會的、政治的關聯の把握を根柢として把住されて居り、此處に於て實に明瞭に人間の *Dasein* が世界形象を規定してゐるのを認め得るのである。アナクシマンドロスの *Ursprung* は *Beginn* des Prozesses der Projektion der Polis in

das Weltall (W. Jaeger, op. cit., S. 220) であるとか、Verstaatlichung des Weltbildes (K. Joël, Geschichte der antiken Philosophie, Tübingen 1921, S. 258) であると云はれてゐる。今日の Kosmos なる概念や所謂自然法則なるものは、實に斯くして獲得されたのであつて、それらはその根源に於て人間的存在に内在する一の整調決濟だつたのである。然も、斯かる世界の整調は、人間生活に於けると同様、神々が外より之を行ふと云ふ意味に於てではなく、實に、それが神的支配をも規定する時の法則性に依つて *manent* に行はるる意味に於て、一の宗教的意義を伴ふものなのである。此處にも、タレスに認められたる汎神論的傾向が明示されてゐる。無限なるものが『萬有を包攝し且つ萬有を統御する』(Arist. Phys. 203b12) と言はれ、或は、神話の世界に於ける神性と人間性の唯一の識別的屬性『不死不滅』*ἀθάνατον καὶ ἀνώλεστον* がそれに冠せられたるは、決して無視さるべきではない。

アナクシメネスが空氣なる質的に規定されたる經驗的物質を以て實在の根柢としてゐると見らるる點に於て、その先輩アナクシマンドロスより哲學的に一歩も進歩しなかつた、と論ずる者もあり (cf. F. Zeller, Die Philosophie der Griechen, Leipzig

1923, Teil I Hälfte 1, S. 330)又多くの哲學史家(e. g. W. Windelband op. cit., S. 43)はアナクシマン드로スよりアナクシメネスに至る思惟過程に於て、形而上學の見地より自然科學の見地へ再び歸り往く推移を見んとしてゐる。確に、アナクシメネスが空氣を萬有の原質として、その稀薄化並に濃厚化なる單なる二作用に據つて萬有の構成を説明せんとせる點に於て、吾人は萬物の質的區別を量的決定に還元せんとする態度を窺ひ得、以て、自然科學の一大飛躍を確認する事は可能であらう。然し、彼の稀薄化並に濃度化はアナクシマン드로スの先の *ousia* の發展に過ぎざるものであり、少くともそれと同じ思惟動機に立つものと看做され得るのである。此點、存在の生ける形態としての二律背反は、實にギリシヤ的思惟にとつて根本的なるものの一つであつたと云へやう。アリストテレス(*Phys.* 184a12)はアナクシマン드로スに於ても、稀薄化と濃厚化の作用が認められてゐたかの如くに述べてゐるが、是が果して正確な歴史的敘述なりや否や疑ひなきを得ないとしても、兎も角斯かる見解の存する事は、以上の點を裏書せるものとも見られ得るであらう。アナクシメネスが空氣を以て生ける存在の原理としたる動機には、所謂ミレトス學

派全體を貫き流るる連綿として断えざる思惟動機が洞見されるのであつて、其意味に於てのみ、彼は彼等の後繼者だつたのである。タレスよりアナクシマンドロスに至る思惟過程に於て、吾人は其處に、永劫に變化流轉して罷まざる生の過程に對する強き形而上學的意識の追求の結果として、その流動の根柢にあつてそれ自らは變せずしてそれを支配する究極的なるものが求められ、而して、形あるものを條件づけ規定し、有限なる存在を統一する、無限なるものが把握された事を見た。アナクシメネスの空氣と稱したるものは、結局この無限者を具體的に見んとしたものに過ぎなかつたのである。

彼の著作の今日に傳はる唯一の眞の斷片と想はるるものに言ふ。「正に恰も吾人の魂が氣にして吾人を統合せるが如く、亦、斯くの如く、氣と息が全宇宙を包攝してゐる」(Act. 1, 3, 4)と。此處に吾人は如何に世界形象が人間的存在過程との *And-logie* に於て構成されたかを、如何に空氣なるものが *Lebendigkeit* のシムボルとして把握れてゐるかを、最も明晰に認め得るであらう。又、是等の言葉の裏に、ミレトス學派に通ずる傾向として先に指摘されたる汎神論的立場が明確に看取され得る

でもあらう。アナクシメネスがその世界原理を *tyche* とも稱したる事や、神々及び神性なるものもそれより發生すると述べた事(Hipp. Ref. 1, 7)などよりしても、是が認められるであらう。吾人は世界と魂並に神との統一が、歩一步益々明瞭に語られ往くを察知し得るのである。恰も、先のタレスに於て、かの第一の命題よりも第二の命題が寧ろ第一義的なりと考へ得るが如く、アナクシメネスに於ても、空氣そのものよりも寧ろその無限性並に不定性がその根柢をなしてゐると言はざるを得ない。キケロが彼の空氣の不定性に関して『恰も何等定形なき空氣が神であり得るか。の如くに』*quasi aer sine ulla forma deus esse possit* (Do nat. deor. 1, 10, 26)と云つてゐるのは、即ちこれなのである。